

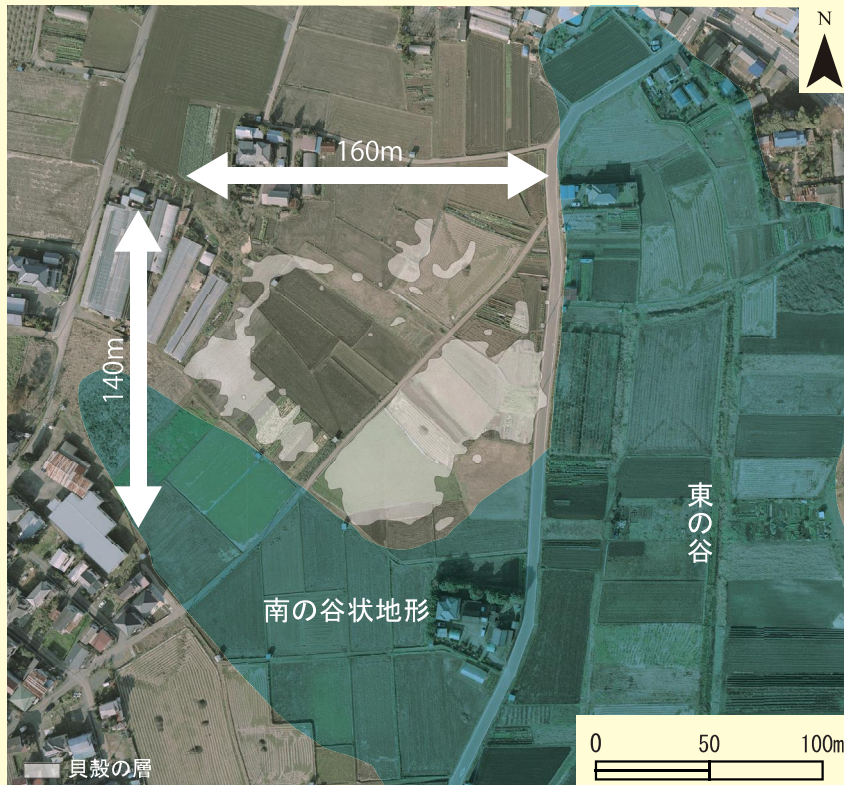
史跡 神明貝塚

水辺と森に育まれた縄文のムラ

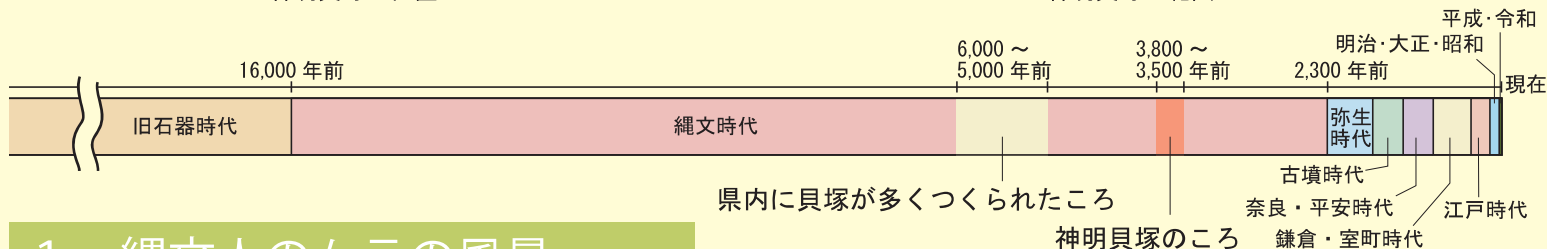




神明貝塚の位置



神明貝塚の範囲



1 縄文人のムラの風景

史跡神明貝塚は、春日部市役所から北東に8kmの西親野井地区にある、3,800～3,500年前の縄文人のムラの跡です。下総台地と呼ばれる標高9～10mの高台に立地し、東側には標高6mほどの谷があります。ムラの周囲には森が広がり、東の谷は川や湖、海へとつながっていました。

神明貝塚では、東西160m、南北140mのドーナツ形に貝殻の層が広がり、厚さは20～60cmを測ります。貝殻の層には魚や動物の骨、炭化し



貝殻の層の断面



縄文人のムラの様子

た植物の種実、土器や石器などの生活道具が含まれています。

貝殻の層の下からは、縄文人のイエや墓などが発見されました。縄文人は、3,800～3,500年前の300年間、中央の広場を取り囲むようにイエを建て、その周囲に貝殻や骨、土器などを捨てました。

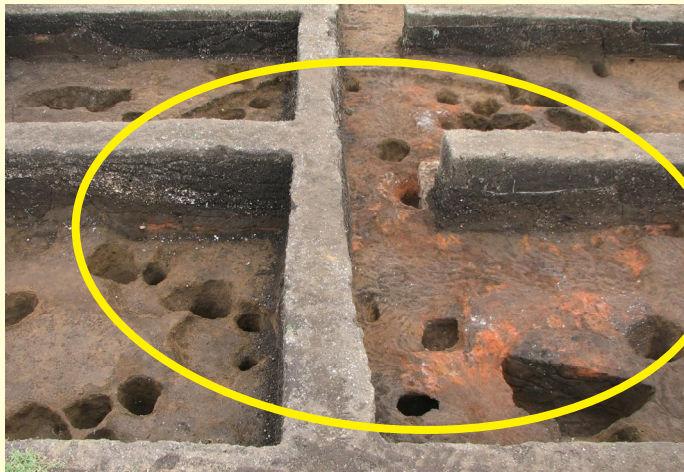
発掘されたイエや土器を調べると、300年の間にムラの景観や文化、生活が変化していったことがわかりました。前半期はドーナツ形の貝塚の中でも外側にイエが建てられましたが、後半期はそれよりも内側に建てられました。



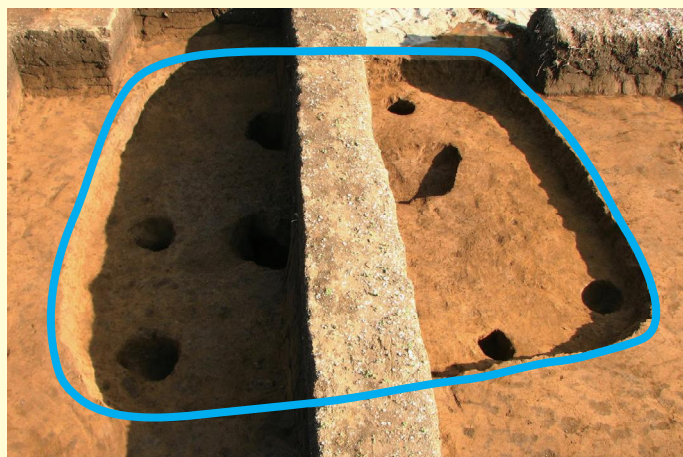
前半期のイエの分布



後半期のイエの分布



前半期のイエの形



後半期のイエの形



前半期のいろり



後半期のいろり



イエの中での生活の様子

前半期と後半期ではイエの形も異なっていました。前半期のイエは、直径 6m 程度の円形に地面を掘りくぼめ、掘った穴の壁に沿って多数の柱が立つ構造でした。一方、後半期のイエは、約 4m 四方の四角形に地面を掘り、四隅に柱が立てられました。イエの中で煮炊きをするためのいろりも、前半期はたき火により地面が真っ赤に焼け、灰が厚く溜まっていたましたが、後半期はあまり地面が焼けておらず、灰は溜まっていませんでした。

土器の形も、前半期は煮炊きをするためのバケツ形が大半ですが、後半期は盛り付け用の鉢形の土器など、様々な形の土器がつくられました。



前半期の土器の形



後半期の土器の形



約 6,000 ～ 5,000 年前
埼玉県に多くの貝塚がつくられたところ



水辺のイメージ (手賀沼)



発掘された貝殻・魚の骨



神明貝塚の貝の種類



約 4,000 ～ 3,000 年前
神明貝塚がつくられたところ



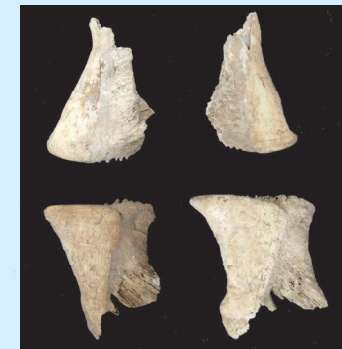
貝拾いの様子



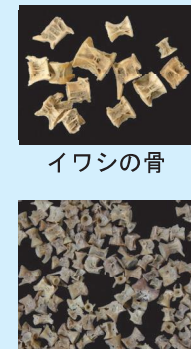
クロダイ・スズキの骨



トビエイ・コチ・ボラの骨



フグの骨



イワシの骨



コイの骨

2 縄文人が食べた貝、魚

今から 6,000 年前、温暖な気候となり、海面が上昇して春日部市には奥東京湾と呼ばれる海が広がりました。縄文人は干潟でアサリやハマグリ、カキ、ハイガイなどをとって食べ、数多くの貝塚がつくられました。

その後、4,000 年前には気温が下がり、海岸線が南下したため、春日部市には川の水と海の水が混じり合う湖や河口などの汽水域が広がっていたと推定されています。

神明貝塚の貝殻には、カキやハマグリなどの海の貝もみられますが、汽水域に生息するヤマトシジミという貝が 99% 以上を占めています。

また、発掘されたヤマトシジミの貝殻を分析したところ、水が温くなる春から秋にかけて、特に 4 ～ 6 月に多くとっていたことがわかりました。



漁の道具（うき、おもり）

神明貝塚で発見された魚の骨は、淡水魚のコイやドジョウ、ウナギ、海水魚のイワシやスズキ、クロダイ、トビエイ、コチ、ボラなど、様々な種類があります。これらは、縄文人がヤマトシジミをとっていた汽水域で生息することが可能な魚であることから、縄文人は近くの汽水域を主な漁場としていたことがわかります。

また、汽水域では非常に珍しいフグの骨が多くみつかっています。フグの骨には、大型のものや小型のものもあることから、産卵の季節に奥東京湾の最奥部にやってきた親フグや、生まれた子フグをとっていたと考えられています。フグには毒があるので、縄文人はその毒を取り除く技術をもっていたようです。



漁の様子

魚の骨のほか、漁に使う網に付けるうきやおもりも発掘されています。神明貝塚の縄文人は、東の谷から丸木舟などに乗って汽水域へ出て、網や仕掛けによる漁を行っていたと考えられています。



屋外のたき火の跡

3 縄文人の塩作り

前半期のイエのいろりや、屋外のたき火の跡は、強い熱を受けて赤くなり、灰が厚く溜まっています。また、灰を溜めた穴や土器も発見されました。

これらの灰を分析したところ、浜辺に生育するアマモという海藻に付着する、微小な巻貝が含まれていました。



灰を溜めた穴



灰が入った土器



ムラ総出での作業の様子



アマモ（木更津市金田海岸）



微小巻貝

それらは塩作りが行われていた遺跡から発見されることが多く、「常陸国風土記」や「万葉集」などの古代の文献には、「塩を焼く」や「焼くや藻塩」などの言葉がみられます。

神明貝塚の灰も塩作りと関係していると考えられます。

4 縄文人が捕らえた動物

神明貝塚では、魚だけでなく、陸上の動物の骨も発掘されました。シカやイノシシの獣が多く、ノウサギや水鳥のカイツブリもみられます。

動物の骨のほか、狩りの道具である弓矢に装着する石の矢じりなどがみつかり、縄文人はそれらを使ってムラの周囲の森にすむ獣や、水辺にやってきた鳥などを捕まえていました。

縄文人は捕らえた動物を食べるだけでなく、骨や角、皮などを道具として利用しました。神明貝塚では、シカの角を加工し、ベンガラという赤い顔料を塗った装身具も発見されています。



土器とともに発掘されたシカの下顎



イノシシの骨



シカの骨



狩りの様子



シカの角の装身具



狩りに使用する石器



屋根の骨組みが焼け残ったイエ



炭化したクリの骨組み (146cm)

5 縄文人が利用した植物

縄文人は、ムラの周囲にある植物も多く利用していました。神明貝塚では、屋根が焼け落ち、骨組みが炭になったイエが発掘されました。その骨組みの8割がクリの木を利用したもので、中には長さが146 cmもあるまっすぐな骨組みもあり、縄文人が木材を巧みに加工していたことがわかります。



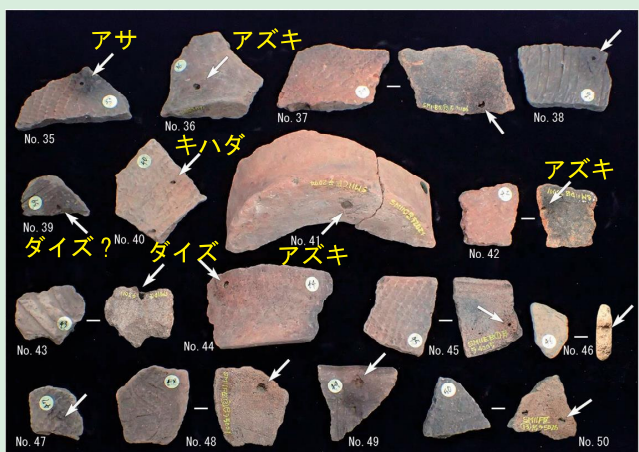
貝殻の層から現れた炭化物と灰

炭の破片や粒は、屋根が焼け残ったイエだけでなく、貝殻の層からも大量に発見されました。これらを採取し、分析したところ、クリやオニグルミ、トチ、コナラ、コウゾ、キハダ、サンショウ、ニワトコ、ミズキといった木の实や、ダイズやアズキといった豆類など、食用として利用可能な植物の種実でした。

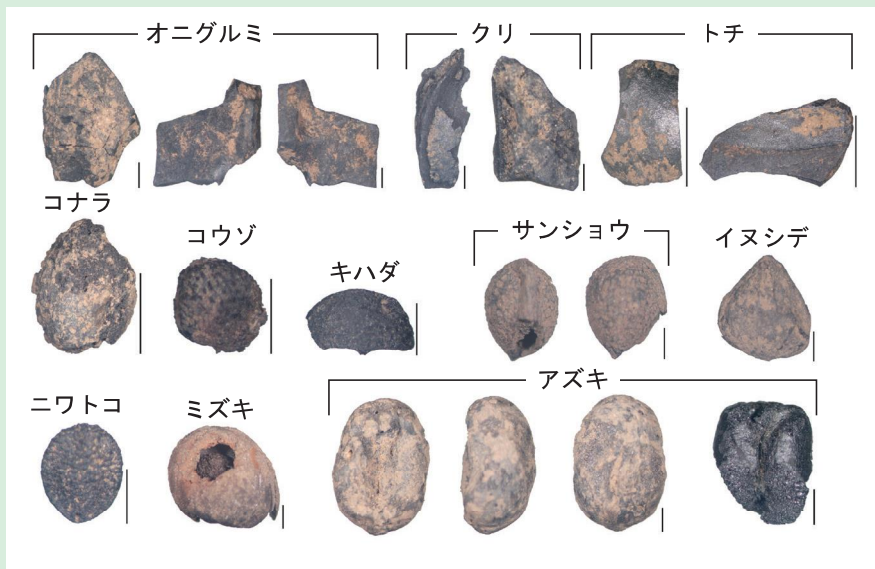
炭化した種実のなかでも、特にクリやオニグルミの殻が多く、食用となる中身を取り、殻を捨てたためと考えられます。また、ダイズやアズキの豆は、野生種のツルマメやヤブツルアズキの豆よりもやや大きく、縄文人がそれらを栽培していた可能性があります。



種実の加工に使用する石器



種実の痕が残る土器



発見された種実

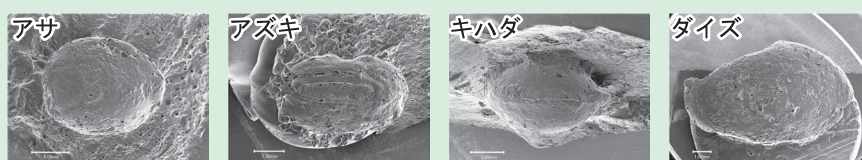


クリ拾いの様子

炭化した種実のほか、植物の種実の殻を割ったり、すりつぶして粉にする石器も多く発掘されており、神明貝塚の石器の6割を占めています。また、土器の表面を詳しく観察すると、小さなくぼみがありました。このくぼみの型をとり、電子顕微鏡で観察すると、ダイズやアズキ、アサ、キハダの種実が土器をつくる際に粘土にまぎれ込んだ痕であることがわかりました。神明貝塚では、植物が非常に身近な存在であったことがわかります。

そこで、東の谷の土壌を分析したところ、クリやオニグルミ、トチの花粉が多く含まれており、神明貝塚の周囲にそれらの森が広がっていたことがわかりました。

さらに、神明貝塚で発掘された人骨からコラーゲンを抽出し、分析をしたところ、神明貝塚の縄文人は植物を多く食べていたことがわかりました。貝塚といっても、主食は海産物ではなく、陸上の植物であり、縄文人の食生活の多様性を示しています。



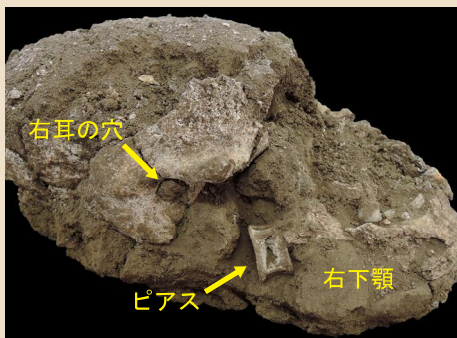
土器に残る種実の痕の電子顕微鏡写真

6 縄文人の弔い

神明貝塚では、これまでに5体の人骨が発掘されています。30～60歳ぐらいの成人の骨で、いずれも頭を南向きにして埋葬されていました。死者の弔いに一定のルールがあったことがわかります。その中でも、神明貝塚の北側で発掘された壮年から熟年の女性(5号人骨)は、両手を左胸の上で合わせ、右手首にはベンケイガイという外海にすむ貝のブレスレットを、右耳にはサメの背骨でつくられたピアスを着け、膝の上には土偶が添えられていました。



死者を弔う様子



5号人骨の右側頭部とピアス



サメの背骨のピアス
赤く着色されている



5号人骨



5号人骨の右手首とブレスレット



ベンケイガイのブレスレット



5号人骨とともに発掘された土偶

7 史跡神明貝塚の重要性

日本列島の中でも、東京湾沿岸は縄文時代の貝塚が最も多い地域です。その最北部に現存する神明貝塚は、汽水域の縄文人の生活を物語る非常に重要な遺跡です。また、魚貝をとりつつ、森や野原から得られる植物を主食とするなど、縄文人が周囲の環境に即した食生活を送っていたことを示す貴重な文化遺産です。一方で、ベンケイガイのブレスレットやサメのピアス、東北地方北部の影響を受けた土器や、糸魚川地方で産出されるヒスイの玉も発掘され、遠隔地と交流があったことも示しています。

こうした特徴から、令和2年に国の史跡に指定されました。国民共有の財産として未来永く後世へと保存し、活用する必要があります。



東北地方北部の
影響を受けた土器



ヒスイの玉



発行 令和7年3月21日
編集 春日部市教育委員会
イラスト 石倉慶子
印刷 華陽印刷株式会社



東武動物公園駅(東武スカイツリーライン)から
関宿中央ターミナル行きの朝日バスに乗り、
西親野井バス停で下車、徒歩5分※駐車場なし